足立史談
第699号
2026年５月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
ＴＥＬ 03-3620-9393
ＦＡＸ 03-5697-6562

もくじ

千住・足立の武士と町人・百姓（下・終）…P1　明治九年御巡幸御用扣（上）…P2
森鷗外が発表した千住の家…P3

千住・足立の武士と町人・百姓（下・終）

多田文夫

郷士一族の広がり

これまで（本誌六九四～五号）でご紹介した「郷士」身分の代表例が阿出川氏の一族です。区内外の古文書に記載された内容からご紹介しましたが、連載を終えるにあたって、その後の足跡をご紹介します。

前回ご紹介したとおり、阿出川氏一族の墓所は、扇二丁目の性翁寺にあります。阿出川対馬守貞次の供養地蔵菩薩は【図1】、元和二年（一六一六）の年号が記されています。地蔵菩薩であることから追善供養のため建立されたもので、後年のものと考えられますが、形式と文字から江戸時代に建立されていると推定できます。

【図1】阿出川貞次の供養地蔵菩薩　扇二丁目・性翁寺所在

向かって左側には、阿出川貞次と阿出川一族の由緒碑（【図2】）がありますので刻まれた一文を紹介します。

※　カタカナ表記をひらがなにし、句読点を追加しました。

阿出川家大先祖、阿出川対馬守は、元小田原北条家の家臣にて、宮城に居住す。
慶長のころ、時の将軍に、当寺の由緒を申上げ、御朱印十石を賜わり再興する。
故に、当寺中興の大檀那にして、法号「性翁院殿」と贈らる。
堀ノ内、阿出川越前守、本木、阿出川丹後守、ともに元和三勇士と伝えらる。
昭和四十八年六月一日
施阿立誉
総代世話人　阿出川信孝　阿出川武雄
阿出川誠一　阿出川熊蔵　阿出川林助

【図２】阿出川一族の由緒碑
同寺所在

この由緒碑を見ると、元和の頃、堀ノ内の阿出川越前守、本木の阿出川丹後守が、対馬守貞次とともに活躍していると伝えられています。

前回で紹介した堀ノ内の「郷士」阿出川幸之進は、越前守の子孫であり東叡山寛永寺に出仕していたことがうかがえます（「阿出川家由緒書」旧中央図書館複写収集資料）。足立周辺では幸之進は文政年間（一八一八～三〇）の人、同じく前回紹介の阿出川平左衛門も幕末まで幕府の役人として活動しています。この

ように見ると、「郷士」という存在自体が江戸時代を通じて二重身分を代表しています。

ところで性翁寺の墓地を見学していると「阿出川家」と記した墓所が、あちこちに広がっており、子孫が広がっていることを実感します

「郷士」子孫の文化芸術

二重身分の家からは、明治時代以降も活躍する人々が登場しています。小右衛門新田の郷士、日比谷健次郎は日本最初の和独辞書『和獨對譯字林』を明治一〇年（一八七七）に刊行し、阿出川家からも画家、阿出川眞水が登場、さらに江北地域からは、国の名勝荒川堤桜を支え植物学に造詣が深い舩津静作がいます（江戸時代の舩津家も二重身分が見られる）。このように全国に影響を与えた文化芸術の担い手が登場していることも特徴です。

「二重身分」を切り口に、江戸時代の千住・足立の社会を探ってみました。いま江戸の身分制は、「武士」「町人」「百姓」を中心に構成されているというのが教科書の理解です。

しかし足立区や周辺の事例を考えると、その枠組みでは捉えきれない人々が見えてきます。研究会（学会）でも、「職分」という、社会の中で果たす役割についての意識が深く浸透していたことが理解の主流となってきています※。こうした見方と、わたしたち足立の歴史が指し示す事例から、シンプルな身分制ではなく複合的な社会があったことが明らかで、地元、足立を通じて豊かな歴史像を紹介できればと思います。

※【主な参考文献】　平井上総『兵農分離はあったのか』（平凡社、二〇一七年）、身分と職分については横山百合子『江戸東京の明治維新』（岩波新書、二〇一八年）

―終―　（郷土博物館学芸員）

【新史料紹介】

大久保家文書
明治九年御巡幸御用扣（ひかえ）（上）

大石瑞樹

明治五年（一八七二）から十八年（一八八五）にかけて行われた明治天皇の御巡幸、その道中の宿駅ではどのような対応がなされていたのでしょうか。

今回から全三回にわたって、昨年夏に文化遺産調査にて当館が確認し、特別展『千住宿４００年』でも展示を行った「御巡幸御用扣」をご紹介します。今回はそのうち、特別展にて展示された部分の内容について解説します。

■資料について

【史料】（「御巡幸御用扣」表紙）

本資料は明治九年（一八七六）の明治天皇の奥羽巡幸の際、「御行在所」（ごあんざいしょ）を設置した千住駅での応接の記録です。行在所とは、行幸時に天皇・皇后が休息する宿泊所を指します。場所は現在の千住三丁目七六番から七七番、貸座敷「中田屋」（横尾龍助方。当時）があてられました。

表題にもあるように、控（扣）として、当時使用された文書の写しとみられる文章が多数含まれています。この巡幸では、千住にて皇后一行が見送りを行いました。そのため、その後の行在所よりも滞在人数の規模が大きかったことが推測されます。

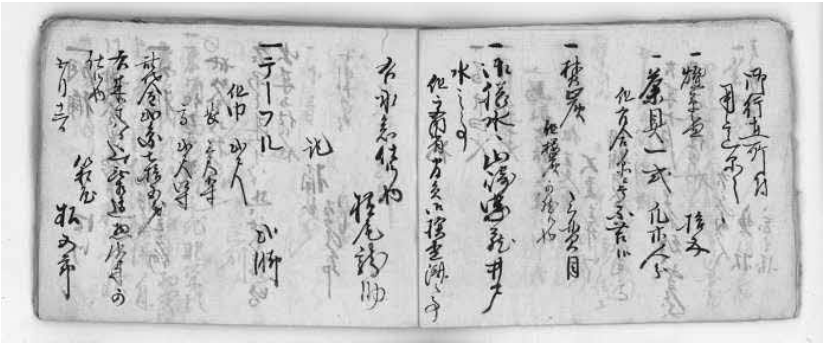
表紙には「大久保氏」とあり、当主の大久保宗平が千住本町の副戸長を勤めていた関係から、御巡幸対応の指揮をしたとみられます。

■行在所での準備

【展開部（九丁目裏）翻刻】

御行在所付
用意品々

一、煙草台　拾五
一、茶具一式　凡廿人分
　但有合ノ品ニテ不苦候
一、焚炭　三貫目但桜炭
可然候也
一、御膳水ハ山崎忠蔵井戸水之事
　但宮内省官員御検査済候
事
右承知仕候也
横尾龍助



【史料】（「御巡幸御用扣」特別展示時展開部）
この展開部では二つの覚書が確認できる。

一つ目の覚書には「御行在所付用意品々」とあり、天皇・皇后の行在所での滞在に向けて用意された物品について書き上げられています。これをみると、煙草台十五個に茶具一式をおよそ二十人分用意しており、既存の物品で応じるとしています。

また、焚炭は三貫目で桜炭を推奨、御膳水は既に宮内省官員が検査を済ませた山崎忠蔵家の井戸水を指定と、消費財の品質について細かく定められていたことが分かります。

これらを承知している横尾龍助は、当時千住にて旅籠屋を営み、御行在所として自身の宿を提供した人物です。

■備品の明細

【展開部（十丁目表）翻刻】

記

一、テーブル　弐脚

但巾　弐尺

長　三尺五寸

高　弐尺四寸

此代金弐圓七拾五銭

右来ル十八日迄ニ無相違惣出来可仕

候也

五月十二日　箱屋　松五郎

行在所用意品々に続く十丁目表には、備品調達についての覚書※が書き留められています。作成者は箱屋松五郎で、幅二尺（約六〇cm）、長さ三尺五寸（約一〇五cm）、高さ二尺四寸（約七十三cm）のテーブル二脚について、代金は二円七十五銭、十八日までに用意できるとしています。以上の内容から、これはテーブルの注文請書の写と思われます。

次回は、巡幸前に行われた道路環境の整備について解説します。（続く）

（郷土博物館専門員）

※「覚書」＝現代では当事者間の合意事項を記録する、簡易な合意文書となりますが、江戸時代には重要な文書や私的な事項まで備忘録として記した史料で「手控」「手日記」という表題の場合もあります。

（編集注）

森鷗外が発表した千住の家

郷土博物館

1　原典からの再考

■文化財登録の名称　令和七年度、あらたに文化財に登録されたのが、「森鷗外旧居　橘井堂跡」です。

「橘井堂」（きっせいどう）とは、医者のいる堂という意味の漢語表現で、医院や病院を意味します。中国の古典「神仙伝」の逸話で、医師が橘と井戸水で病を治癒したという神話から「橘井」は医師を意味しています。「橘井堂」が医院を意味して重複するため、医院を省いた名称となりました。

場所は千住一丁目三〇-三で、北側区道沿いに案内モニュメントが設置されています**（写真参照）**。

なお鷗外は二〇代の若い時代にここで過ごしました。文壇デビューも、最初の医師免許も、陸軍への出仕も、千住でスタートしており、千住の家は鷗外の出発地という特徴があります。

■鷗外自筆の史料から考える　これまで、千住の家については、鷗外自身が、「自紀材料」という家の系譜や略年譜を記した履歴記録の中で、土地の旧家だった岡田紋次郎の家を、父、静男が購入したことを記しています。住所は当時、「千住一丁目十九番地」でした。元の家主の名前は鷗外の小説「カズイスチカ」だと「緒方」という名前で登場します。鷗外自身は「花房」という名前で見ることが出来ます。それでは、たたずまいを記した部分をご紹介します。

火事にも逢わずに、だいぶ久しく立っている家と見えて、頗ぶる古びが附いていた。柱なんぞは黒檀のように光っていた。硝子の器を載せた春慶塗の卓や、白いシイツを掩うた診察用の寝台が、この柱と異様なコントラストをなしていた。

この卓や寝台の置いてある診察室は、南向きの、一番広い間で、花房の父が大きい雛棚のような台を据えて、盆栽を並べて置くのは、この室の前の庭であった。

こうした小説や小金井喜美子の随筆で知られているほか、聞き取り調査を加えた論考もありますが、ここでは原典である鷗外の文章や、千住の土地利用の特徴から直接、再考してみたいと思います。

なお「鷗外」（本来の表記）の文字は、かつて「鴎外」と記されましたが常用漢字表の改訂に伴って現在は「鷗外」と表記するのが一般的なので、ここでは「鷗外」としました。

2 千住の家はドイツで発表

鷗外自身が千住の家について記したもう一つ文献として「日本の住居の一例」（鷗外全集など）として知られた一文があります。明治十九年（一八八六）にドイツのドレスデンの地理学会で講演、さらにベルリンの人類学会で公表されました。タイトルは「日本の住家の民俗学的衛生学的研究」（直訳。タイトル翻訳は東京大学図書館による）となります。この論考は、その後、『Von Westnach Ost』（直訳『から東へ』。明治二二・一八八九年刊行）に掲載され**右図**が収録されています。

間取りのほか部屋や棚の利用方法や井戸の場所も記し、原文タイトル通り生活文化（民俗）を物語るのが一つの目的だったと考えられます。なぜなら発表当時のドイツ人類学会は、フォルクスクンデ（民俗学）の確立期だったからと推定しています。

なお和訳は高田渙「鷗外の千住の家」（本誌一九七号）を参考としました。

■場所について　同論文では、この家は北側にあり、南側には庭があったとしています。

方位について同図では示されていませんが、井戸の位置から推測が可能になります。当時、千住の町は旧道がもっとも高く、東西方向に向かって、ゆるやかに傾斜していました。街道の確保と、何より排水のための構造でした。

また鷗外の漢詩や文章に、Aの部屋が登場します。陳生保『森鷗外の漢詩』（明治書院、一九九三年）では庭に向かった南向きの座敷で漢詩をつくる記述が見えてきます。Aの部屋は南東に向けて窓があり、その先に庭がみえる環境でした。前掲「カズイスチカ」では「診察室」と記されています。

■明治の「千住一丁目十九番地」　この土地は、当時の「千住一丁目十九番地」の一角です。街道に面した半分は、二軒の家が街道に面していて、森家には二つの家の間の路地を通るようになっていたと論文で記しています。

医院「橘井堂」の看板は、鷗外の実妹、小金井喜美子によると街道側に掲げられていたと記されています。千住では当時一般的に、街道面に店や貸家（店借）・貸地（地借）が行われ、土地所有者は奥側に屋敷を設けるのが一般的でした。こうした位置から、森家が地主だったことも想定できます。このことも合わせて、おそらく十九番地の橘井堂の建物部分を表現した図が、本図と考えられます。**想定参考図**を左に掲げました。

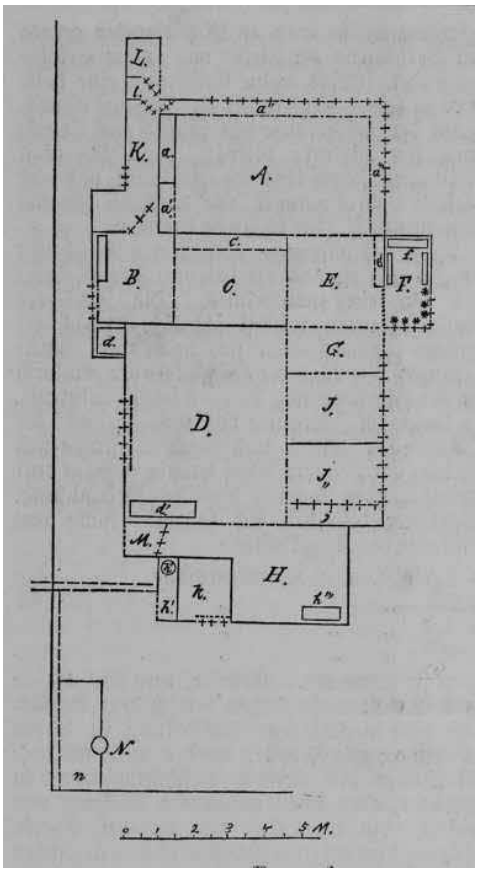
皆さまも文豪鷗外の足跡を訪ねてみてはいかがでしょう。また「Von West nach Ost　東京大学図書館」で検索してご覧になることをお勧めします。

（郷土博物館学芸員　多田文夫）

森家の主な部屋

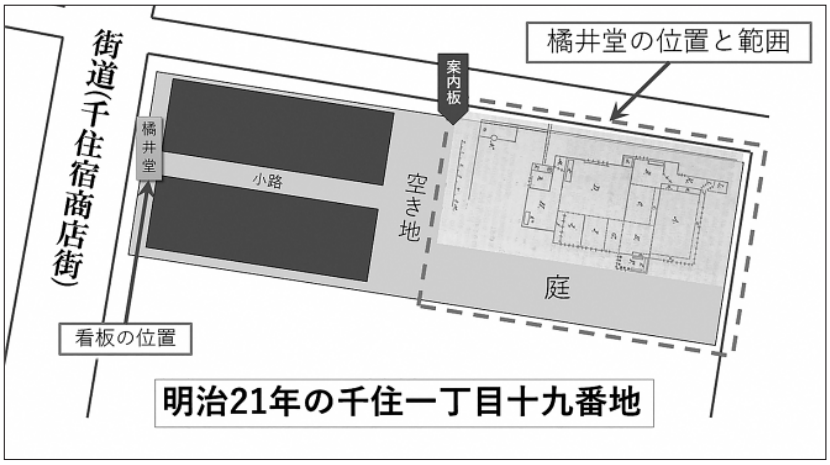
※名称は原文訳。
（　）内=編集註

A=仕事部屋1
（診察室）
a'=書物・器具の棚
B=仕事部屋2
C=家族居室
c'=寝具棚（昼間）
D=仕事部屋3
E=客間（和洋室）
F=薬局（玄関）
f'=薬品戸棚
G=未詳（客間?）
H=台所
h'=タタキ（土間）
h"=飲料水の貯蔵
J,=小部屋
（人力車夫用）
J,,=小部屋
（女中住居用）
K=（廊下）
L=便所
M=便所
N=井戸



明治22年（1889）森鷗外による千住の家（橘井堂）の図

出典＝Dr.Rintaro Mori "Ethnogaraphitch=hngienitche Studie über Wohnhaufer Der Japaner",『Von West nach Ost』. 東京大学総合図書館蔵。



明治21年の千住一丁目十九番地